

シヤンティ

shanti

2011
春
4月号

スラムの図書館

特集

難民キャンプから

30年



公益社団法人
シヤンティ国際ボランティア会



2010年12月11日、キップオフ・パーティーで、「かけしプロジェクト」のスタートを宣言しました
 ①「絵本の世界、子どもにとって絵本がどんな役割を果たすか」佐藤涼子さんが専門家の視点から講演
 ②落語芸術家協会・桂歌若師匠の落語。ほかにマジック、スタッフの寸劇も
 ③80人を越える参加者が集まり、スタッフは立見
 ④会場で参加者それぞれに「自分のかけし宣言」を書いてもらった
 ⑤30周年記念ソング「心のかけし」が佐藤晴夏ちゃん、岡野雅代さんの歌でお披露目。参加者全員で合唱

道

巻頭言

行動する市民、
地域の人々と共に

事務局長 関尚士

カンボジアから逃れてきた難民を救いたい。その一心で難民キャンプに飛び込んだボランティアたちは困難と挫折を重ねながら、自分は何をすべきなのかと自問しました。伝統舞踊や陶芸の教室、母

「共に生き、共に学ぶ」。その姿勢は、海外の現場で活動するスタッフだけでなく、SVAを支えてきた人々にも分かち合われる価値となっていました。「困難な時

代に学べたことのありがたさを出します。一人でも多くの子どもたちに学ぶことの素晴らしさを伝えてあげたい」と募金を寄せていただく年金暮らしの女性。ラオスに届ける絵本づくりで絵本が持つ魅力を思い出し、娘にも読み聞かせをしたいと語る企業勤めのお父さん。タイの農村でのホームステイ経験がきっかけとなって、引きこもりをやめ、NGO職員として差別と格差社会の解決に取り組

みはじめた若者。 私たちSVAが目指してきた社会、すべての人間の尊厳が保たれ、互いの違いを多様性として称え合うことができる社会の実現には、そうした気づきと思いやりを



関尚士（せき・ひさし）
3月に勤続20年を迎えた



⑥立食パーティーでは、歓談の輪が広がった
 ⑦参加者が持ち寄った本やCDを回収する箱も置かれた
 ⑧「心のかけし」のCD、「本から本へのプロジェクト」マニュアルがおみやげに
 ⑨1980～81年のカンボジア難民キャンプ。この人びとと向かい合ってきた

「変える」のではなく「変わる」きっかけとなること、「開発」ではなく「開発」。活動に参加することで自分自身を見つめながら、これからも皆さまで共に関わってゆきたい。

（広報課 青島寿志）

SVAの使命
 私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。

Cover Photo
 クロントイスラムの上を横切る高速道路の下で移動図書館活動。スタッフが一緒にゲームをして気持ちを盛り上げる。子どもたちはわくわく。(写真提供：瀬戸正夫)

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project

日本
SVA 30周年が始まりました

SVAの30年、それは活動に関わってきた一人ひとりの30年でもある。私自身のきっかけは「カンボジア難民キャンプに古着を送る運動」に地域が協力していたこと。そのとき自分は小学生、海外で起こっていることを感じたのは初めてのことだった。

2006年、カンボジア事務所が研修した。難民キャンプの生活について住民にインタビューした時、昔の生活について話すときは、厳しい顔をしていたおじさんが、図書館の話になると懐かしそうに笑顔を見せてくれた。カンボジア事務所のスタッフには難民キャンプでSVAが印刷した本に出会い、人生が変わったと話してくれたス



図書館ってどんなところ

絵本と育ったギップさんのはなし



就職先を探していたときに、ちょうど図書館でスタッフの求人を知り、応募しました。動機は、毎日、本を読んで暮らせると思ったから。それが実は、朝から床拭き、絵本の整理、やんちゃな子どもたちとの格闘と、予想外の息つく暇もない業務内容に何度、辞めようと考えた

就職先を探していたときに、ちょうど図書館でスタッフの求人を知り、応募しました。動機は、毎日、本を読んで暮らせると思ったから。それが実は、朝から床拭き、絵本の整理、やんちゃな子どもたちとの格闘と、予想外の息つく暇もない業務内容に何度、辞めようと考えた

ク ロントイ図書館の裏の家で育ったギップは、毎日、小学校の行き帰りに図書館の前を通っていました。8歳のころ、初めて本を借りてみたら面白くて、それ以来、図書館の常連に。印象に残る本は、「ふたりのイーダ」（黒柳徹子著）。その出会いから、日本へのあこがれ、外国への関心が生まれました。

両親はクロントイ港で雇われ運転手と助手をして生活をしていました。高校に入る頃、不景気の煽りを受け、生活は厳しくなりました。学費を自分で賄うことを決心し、夕方はバイトの生活が始まります。仲のいい友達みんな、私立・公立の有名大学に進路を決定していく中、自分もどうしても大学を卒業したいと思いました。両親に学費の負担を頼むことは不可能と分かっていたので、働きながら勉強できるオープン大学を選びました。

ク

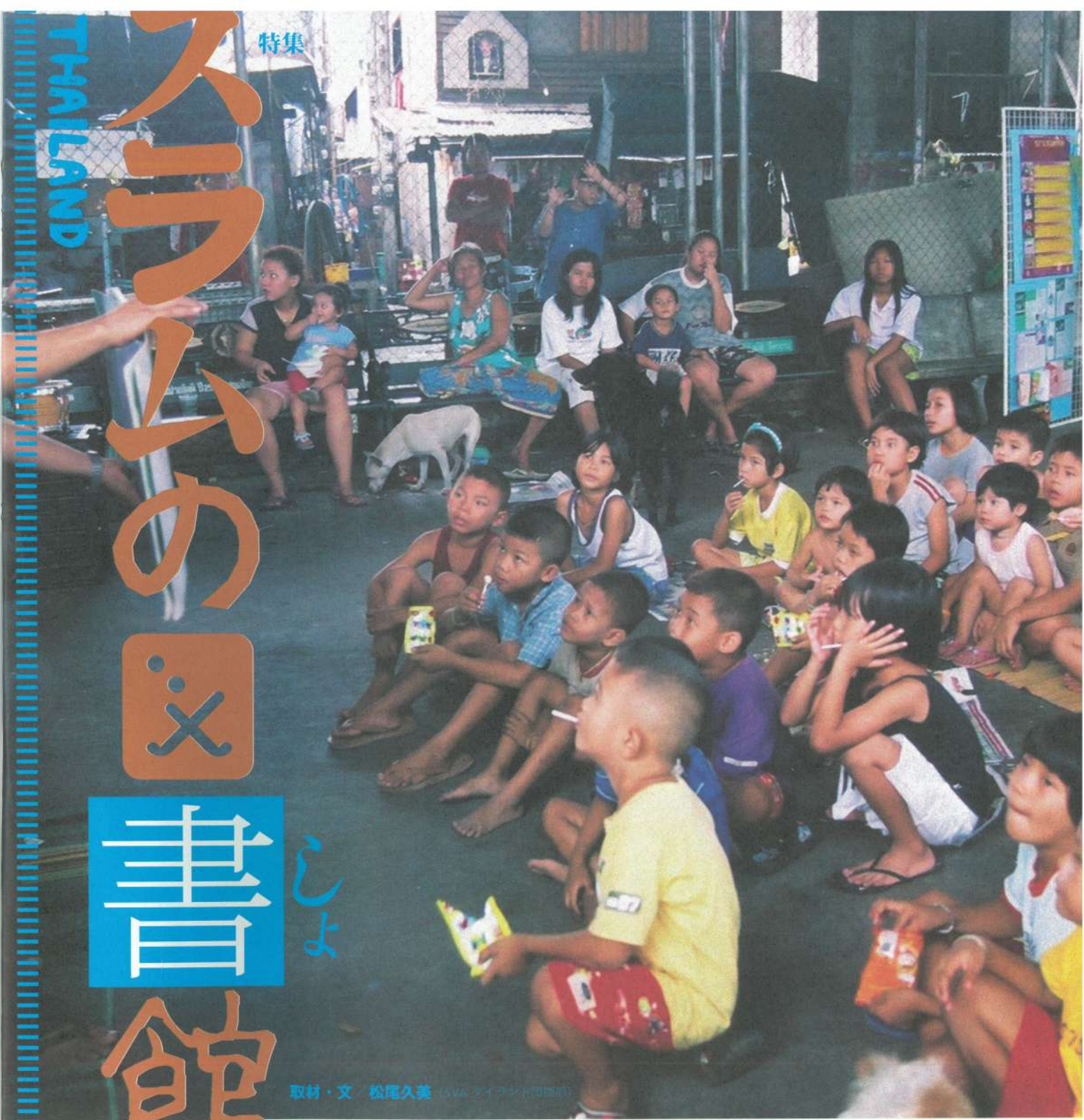
ロントイ図書館の裏の家で育ったギップは、毎日、小学校の行き帰りに図書館の前を通っていました。8歳のころ、初めて本を借りてみたら面白くて、それ以来、図書館の常連に。印象に残る本は、「ふたりのイーダ」（黒柳徹子著）。その出会いから、日本へのあこがれ、外国への関心が生まれました。

か知れません。それでも徐々に慣れ、やはり大好きな本と、その本を囲む子どもたちの笑顔に支えられて続けられたのかな、と当時を振り返ってくれました。

大学は、通常より時間がかかり、2008年に6年間で卒業。26歳の時でした。家族の誇りとなりました。この頃には、シーカー・アジア財団の中で中堅スタッフとして大きな責任を持つに至っていました。現在、コソコソと習い続けた日本語は基本的な会話なら十分こなせるようになっていきます。「イーダ」との出会い以来、続く、幼いころからのあこがれがしっかりと個性となったのです。

ギップの言葉です。

「ここに来る子どもたちが、自分の小さい頃と重なって見えます。誰かがある時、大好きな一冊に出会うかもしれない。その一冊が、その人の一生を変えることになる可能性があるのです。私と同じように。その出会いのチャンスを考えるのが、図書館と私たちの役割だと思っています。どんな環境でも、自分の好きなことさえ、はつきりしていれば、速度はどうかあれ、その方向に進んでいけると思うのです。」



取材・文 / 松尾久美 (VVA、タイランド国際局)

クロントイスラムの上を横切る高速道路の下。子どもは絵本の世界に吸い寄せられていく (写真提供: 瀬戸正夫)



上: お絵描きワークショップにて歴史好きでとってもウーちゃん (3歳)
下: 11月、ロイクラトン (灯籠流し) に親子で灯籠作り活動



4月、タイ正月ソングクラン (水かけ祭り) の様子



上: 図書館で日本語教室も始めたギップ
下: 自分たちで手作りの工作で買い物のごっこ

アリッサー・ウッパシー=ギップ (28歳) クロントイスラム地区出身、18歳から図書館で働き始めて11年目。日本での研修1年、津波復興支援での活動2年間を経て、現在は、図書館事業のアシスタントコーディネーターを務める。仕事の速いしっかり者で若手スタッフの核となる存在。

1980年代のはじめ、カンボジア難民キャンプで難民救済の活動をしながら、スタッフはタイの農村、そしてバンコクのスラムに住む人びとにも目を向けていきました。湿地帯やゴミ集積場の近くに建てられたバラックでの住民票もない暮らし。子どもたちの教育がおざりにされていたのはいうまでもありません。そんなスラムの子どもたちに向けて始まったのが「クロントイ・キャラバン」。日本から来た「おはなしキャラバン」の人形劇公演に刺激を受け、SVAと他団体が協力してチームを作りました。移動図書館車がスラムの路地に入っていくと、小さな子どもたちがわっと寄ってきて、「クロントイ・キャラバンが来たよー」と合唱が始まります。荷物運びを手伝おうとする子どもたちが車を囲み、スタッフに抱きつく子も。ゲームと歌、おはなし、そしてお待ちかねの人形劇。子どもたちは人形と話し、舞台に出て演じます。遊びながら自然に善悪や道徳、生活習慣を学んでいました。

「先生、今度はいつ来てくれるの?」スタッフと別れるときの子どもたちの泣きそうな顔。「クロントイ・キャラバン」は人形劇と一緒に夢と希望を届けていたのです。

タイにスラムができ始めたのは、急激な経済成長が始まった1960年代。困窮していた地方の農民が労働を求めてバンコクに流入して、環境の悪い未開地(湿地帯、線路わき、ゴミ集積所)などに住み始めた。現在は1000カ所以上、人口約100万人に及ぶといわれている。

地域で人を育む図書館

図書館では季節の行事、タイの文化など社会活動を取り入れています。共働きの親が多いスラム地区、ここで歳時を覚え、地域と関わることを覚える子がいます。図書館は自分たちの誇りを養い、ハンデを乗り越える意志をつちかう場になっています。

人形劇の活動

高校生を中心に図書館周辺の保育園を回り、人形劇を披露します。もともとは、2009年のイベントで演じたのが好評で、出演の依頼が来るようになりました。この活動が認められて、青少年による地域活動の全国コンテストにバンコク都代表として出場しました。



タイ舞踊教室

4歳から18歳くらいまでの子どもたちが常時30人ほど週に1、2回練習をしています。タイ舞踊の名手であるノンヤオスタッフがこれまで多くの踊り手を養成してきており、地元はもちろん、他の地域や企業のイベントに声をかけられるほど、高い完成度を持っています。今では高校生が子どもたちに稽古をつけるようになっています。小さな子どもたちにとって、舞台の上で堂々と踊りを披露する先輩は身近なあこがれの対象です。

お絵描きワークショップ、甘えん坊のオーくん(4歳)



図書館ができること SVAタイランド 松尾久美のはなし



夕 方になると子どもたちの声が聞こえてきます。クロントイスラムの図書館は子どもたちの集まる場所です。わたしがシーカー・アジア財団(以下SAF)の図書館活動に出会ってから10年以上が経ちました。今では図書館の2階上の事務所で子どもたちの声を聞いています。学生の頃、元氣いっぱい図書館の子どもたちが遊んでくれたのを時々懐かしく思い出します。

SAFの図書館は、子どもが生き生きできる場所です。一冊の本との出会いから自分の好きなことに気づく子、地域の中での役割に使命感を感じる子、両親のけんかの声から避難してくる子、図書館との関わり方はさまざままで自由です。

現在、生活の上でスラム外の地区との見かけの差は少なくなりました。水道も電気も、テレビも携帯もあり、子どもたちもほぼ全員が学校に行けるようになっていきました。行政が最低限の人権保護の施策を確立させてきたのです。しかし、スラム地区が抱える問題は依然として残ります。外部との経済的な格差、それに伴う教育の格差、青少年の非行、麻薬・暴力の

存在などです。持たれるイメージとしては、やはり怖くて汚い地区というものがほとんどです。地方から、あるいは周辺国からの出稼ぎ労働者がバンコクで住まいを求めるときに辿り着くのはスラム地区。これは家賃が最も安いからです。

SAFのスラムの図書館は、約20年間、3つの地区で運営されてきました。行政からの施策がある程度、整った今、次に必要なことは内側からの発達です。住民が組織化し行政を利用しながら地域の改善を図っていくこと、子どもたちが自分の地域に対して誇りを持つこと、青少年が社会的ハンデを乗り越える意志を持つことが大切なのです。

このため、SAFの図書館は地域の中で、これまでよりさらに大きな役割を担います。人と人、子どもと地域の関係をつなぐ役割。子どもが自分の好きなこと、したいことに気付くきっかけを創る役割。今、スラム地区にコミュニティとしての真価が問われているからこそ、地域をつなぎ、子どもを育む核となる図書館が必要なのだと思います。

松尾久美(まつおくみ) 2007年SVA入職。SVAタイランドコーディネーターとして奮闘中。「バンコクでは人間関係が希薄になっていることが問題になりつつありますが、スラムではそうなっていません。濃厚なコミュニティのつながりがありますよ」

地域清掃・環境整備活動

青少年活動の軸として、長年、続けている活動です。清掃や緑化活動を通して自分たちの地域を大切に想う気持ちを育てます。年の離れた子どもたちが一緒に取り組める活動でもあります。



火災後の図書館

火災後の図書館はテントで地面にブルーシートを敷いただけの仮設になったが、子どもたちは活動を続けた(奥の机に座っているのがノンヤオスタッフ)



火災復興住宅のミニチュアを作成する青少年(右がティー)

図書館はただの施設じゃない 地域の青少年リーダー ティーくんのはなし

ス アンブルー図書館の青少年活動は、スアンブルースラムが全焼した2004年の大火災後、さらに内容の濃いものとなりました。地域活動に積極的に参加する彼らの姿勢に住民からの信頼感が高まり、その存在が地域を活性化させる原動力のひとつとなってきたのです。この地区で、約20年、図書館スタッフを務めるノンヤオスタッフは、火災後のことをこう振り返ります。

「火災直後は、自宅も図書館も全焼して無力感があふれ、正直、途方に暮れていました。しかし、大型テントの仮設図書館にも子どもたちは集まってきました。特に、私にとって頼りになったのが火災前より熱心に通ってくるようになったティーくんら中高生たちでした。彼らの言葉は今でも忘れられません。

「私たちにとっての図書館はただの施設じゃない、私たち青少年が何かを表現できる場所なんだ、だから、たとえテントであっても大事な場所なんだ」。

この言葉に勇気づけられ、それまでの活動の成果を確信したからこそ、3年にも及ぶ長い仮設住宅暮らしの中で熱意を持って活動してこられたと思います。

ティーくんには インタヴューしました

図書館との出会いは?

4歳の頃です。火災前には、ぼくの家は狭い路地を挟んで図書館の向かいにあったんです。だから、ぼくの遊び場、友だち、すべて図書館で調達できました。自宅で縫製の請負業をしていた母親に「おれは、安全とは言えない地域にいて図書館でなら子どもが一人で遊んでも安心できたのだと思います。すぐに本が好きになって図書館の絵本は全部、読みつくしました。子どものころからずっと、本を読んでいる時はぼくにとって幸せになれる時間です。

青年になっても参加し続けているのはどうして?

図書館を通して地域貢献の活動をするようになりましたが、ぼくたちの世代にとってはそれが誇りだったのだと思います。特に、火災があって、地域全体がたいへんな状況にある時期に、何かしなければという想いをみんな持っていたし、実際にすることも多くありました。普段の清掃活動からイベント時の力仕事、後輩たちの勉強の面倒、あるいは青年代表として行政に提案など。だから、とりあえず、時間があれば図書館に行こうというような意識になってい

ますね。

大学生をしながら住民委員に立候補した動機は?

火災からの復興の過程で、ぼくたちの世代ができることが多くあることに気づきました。ぼくにはそれほどの高い能力があるわけではなく迷ったのですが、青年リーダーとして、しないとイケないことがあると思っただけです。

特に、麻薬に手を出してしまう青少年の問題。以前のスラム地区の時代から、再開発を経てきれいになった現在まで、いまだに撲滅することのできないやっかいな問題です。この青少年にとって、麻薬が非常に近くにあり、簡単なきっかけから深入りしてしまいがちです。この年頃は心が揺れ動く時期で、大きな人生の転機。その時に没頭できる活動が地域にあれば、手助けになるのではないかと考えたのです。何かに没頭することで自分の本心に好きなこと、自分の将来にとって大切なことに気づいていくのではと。だから、住民委員となり青少年の活動をより充実させていきたいと思うようになりました。これは、青少年活動に参加してきて、また誤った選択の末、後悔する多くの仲間を見てきた自分だからこそ、できることだと信じています。(談)

タウィーサク・シーカトウニティー(20歳) 幼少よりスアンブルー図書館の常連で、小学生のころから積極的に図書館のお手伝いをしてきた。中学～高校卒業までSVAの奨学金を受け、大学生になったいまも図書館活動に参加。2010年、青少年グループの地域活動が認められ、「国連による子ども会議」にタイ代表として出席した。



鉢植えがおかれて緑が増えたクロントイスラム (写真提供: 瀬戸正夫)

バンコクのクロントイヤスラム
ノンブルースラム図書館で
合った子どもたちのほとんどは常
連さん、だから、いつの間にか顔
を覚えてしまう。そしてクロント
イスラムに住んでいた頃、学校が終
わると毎日のように図書館に来て
いた自宅前の家の女の子は、ど
こかで会うと「じゃあ図書館で
ね!」という言葉をかけていたこ
とが思い出される。タイ事務所の
上階が仕事場だったため、1階に
ある図書館でその女の子と毎日会
うことはなかったが、「図書館」が
私たちが繋いでくれていたことは

確かであった。
図書館が地域で果たしている役
割とは何であろうか? 図書館は生
涯学習機関としての位置づけを持
ち、全ての人々に開かれた教育の
場であり、同時にコミュニティに
おける、住民の地域社会活動への
参加を促す場でもあると思う。ス
ラムや難民キャンプといったコ
ミュニティの活動では、住民の地
域社会活動がよく伺えた。
今はかなり改善されてきている
が、私がクロントイに関わり始め
た1996年ごろ、スラムのゴミ
問題はかなり深刻だった。放置さ
れたゴミの山々、そこで無邪気に
遊ぶ子どもたち。衛生に良くない
といっても遊び場が他にないた
め、仕方がない。また歩きながら
ポイと投げ捨ててしまう住民、環
境問題への意識は十分ではなかつ
た。そこで、図書館を活用して
「クリーン&グリーン(花と緑のプ
ロジェクト)」を実施。住民たちに
ゴミ集めを呼び掛け、図書館まで
届けてもらう。そして集めたゴミ
を用意された苗木や花と交換、家
の周りには次第に花や緑が増え
ていった。ゴミ問題が完全に解決
されたわけではなかったが、環境

への意識は高まっていた。
ミャンマー(ビルマ) 難民キャン
プでは高齢者が月に1度、図書館
に集い、子どもたちに昔話をし
語ってもらったり、歌やゲームな
どを通じて交流したりしていた。
外の世界から閉ざされた環境に置
かれていた難民キャンプの中で、
お年寄りたちは、更に疎外され
た状況にあった。体力的な面もも
ろんだが、キャンプの中の限られ
た地域活動に彼らが参加できるも
のはほとんど無かったからだ。し
かし図書館はお年寄りの知恵や経
験を必要とした。現在も行って
いる民話絵本出版。彼らから、カ
レン民話や詩を記録・収集して、製
作することができ、同時に、カ
レン文化の保存・継承につながっ
ていっている。現在、難民キャン
プでの高齢者活動は行ってはいない
が、お年寄りの家庭を訪問して、
民話の記録・収集を続けている。
スラムといったコミュニティに
おいては、図書館は時として地域
の中心の場となり、そして地
域が抱える問題を解決する一助に
なりえるということを実感した時
であった。

(中原亜紀)

図書館の役割

SVA海外事業課長 中原亜紀のはなし



厳しい環境で暮らす 人びとと共に

シーカー・アジア財団事務局長 アルニーさんのはなし



私はクロントイスラムで育ち、昼間働きながら教員養成学校を卒業しました。
図書館でボランティアをしていたおり、日本から来た「おはなしきやらばん」の人形劇公演を見る機会に恵まれました。「猿カニ合戦」がいきいきと演じられたことを今でも忘れられません。「今日の人形劇の話だよ」と絵本が配られると、日本語で書かれていても、子どもたちは絵本に興味を示し、喜んでいました。
人形劇作りの講習に参加するなどした後、1986年、「クロントイキャラバン」にボランティアとして加わり、SVAのスタッフになりました。この仕事に愛と夢を感じ、その感動は長く私を支えています。
私たちの図書館は子どもをゆつたりさせ、豊かな気持ちにします。友だちと一緒に積極的に活動できるよう、工作やダンス、歌などいろいろな活動を用意しています。そして、読書の習慣を根づかせることが、26年間のバンコクの活動で得られた成果です。
現在は、西北部ターク県での活動に力を入れています。ミャンマー(ビルマ)の国境に接しており、子どもが貧困にさらされ、学習の機会が得にくい状況にある地



右: 西北部ターク県はミャンマー(ビルマ) 国境に接しており、カレン族の村も多い

中: 険しい山あいには点在している村にこそ本が必要—4輪駆動の移動図書館車で回るスタッフたち

左: クロントイスラム図書館で、子どもたちは思い思いにゆったりと過ごす (写真提供: 瀬戸正夫)

親が土地を持っていない、遠くに働きに行かなくてはならない、賃金が安いという悪い条件下にいる山岳民族の子ども。そして、ミャンマー(ビルマ)からの移住者でタイ国籍を持っていないため、不利益を受けている子どもがいる地域です。
奨学金を支給すること。そして子どもの教育の質の向上のため、移動図書館活動を通じて国境の近くの学校を援助する計画をたてています。
今年、移動図書館に参加する学校は45校。子どもが本を読めるようになり、家で他の子に読んであげられるように、読書運動、人形劇を使った物語、読み聞かせ、歌、ゲームなどを提案しました。教員向けに知識を教え、童話を読み、身の回りにもあるもので教材を作る研修もあります。子どもたちが勉強ができるように、タイ語が話せるように、物語を聞いて想像力が豊かになるように、すべては教育経験を助けるものであり、教育の推進をしている人たちを励ますことになりました。社会の中で他者と一緒に、幸せになつていく能力を身につけることを目指しているのです。
(アルニー・ブロンマー)

タイにおけるSVA図書館活動のあゆみ	
1980	カンボジア難民キャンプにおいて移動図書館の巡回開始
1985	ラオス難民キャンプにおいて印刷および図書館の活動開始
1989	村民図書館および移動図書館の活動開始
1991	スアンブルースラムに図書館の設置・運営
2004	バンコクのスラム地区および地方農村に対して移動図書館の活動開始
2005	クロントイスラム、チュアバーンスラムに図書館の設置・運営
2006	津波の復興支援としてコミュニティ図書館を3館設置・運営
2007	津波支援の図書館の一館が、県内の最優秀図書館として県教育局から表彰される
2008	津波支援の図書館として県教育局から表彰される
2010	クロントイ図書館が、コミュニティ図書館のモデルとして全国図書館ネットワークに紹介される

※現在、コミュニティ図書館は、バンコクの3館(クロントイ、スアンブル、チュアバーン)を除き、地域行政などへの運営移管が完了している。

アルニー・ブロンマー(50歳) クロントイスラム地区出身。おはなしキャラバンの活動に参加して以来、職業訓練事業コーディネーター、事務局次長を経て、現在は事務局長を務める。勤続24年。熱い想いと強い推進力で組織を引っ張るリーダー。



田んぼに囲まれた校舎の前で紙芝居をする校長先生（チュムニック小学校）



ボンロー小学校には折り紙で飾られた図書室が作られていた。子どもたちに大人気。



サムラオン小学校では草ぶき小屋の図書室を作った



SVAが出版した絵本を読むサムラオン小学校の児童たち

カンボジア Cambodia 衛星校の挑戦 子どもたちに絵本を!

2010年10月に襲った洪水でバンテイミンチエイ州では橋や道が壊れました。そのために衛星校85校への図書館活動のモニタリングはスケジュールを大幅に変更。2カ月にわたり1月17日に無事終了しました。

今回のモニタリングはバンテイミンチエイ州2郡の全ての衛星校85校に図書館活動を普及させることを目的として、2010年4月からJICAの「草の根技術協力事業」として始まっ

た「クラスタースクール制度の衛星小学校における図書館活動普及事業」において、5月に実施した図書館活動研修会に参加した衛星校の活動がどれくらい進捗しているかをみるためのものでした。

SVAがこれまで対象としてきた中心校とは違い、衛星校は教室も教員も不足し、授業も十分にできない学校もあります。85校のうち6割の学校は1冊の絵本もありませんでした。そんな学校の教員に図書館活動研修をし、絵本を配っても本当に取り組んでくれるのだろうか。不安を抱きながらのモニタリングでした。

モニタリングを終えてみると、中心校以上に素晴らしい図書館活動が出来ている学校、教室が足りず草ぶきの小屋をつくって図書室を開設した学校、1教室しかない学校は中に本棚を置いて文庫を作りました。子どもたちに絵本を！衛星校の挑戦が始まりました。

■手東耕治

タイ Thailand シャンティ学生寮の 生徒たち



寮生がみんなで稲作に取りくんでいる

パヤオ県の寮で、生徒たちは野菜作りや稲作、動物農場など、自身の興味に合わせて作業を分担しています。

その一人、ソムチャイ・ジャンテイくん（17）はタイ北部のタイヤイ族出身、好きな活動は稲作です。故郷は稲作が行われている地域ですが、これまで自分でしたことはなかったそうです。「米づくりを通して、米一粒の栽培には多くの労働と手入れが必要であること、全ての米に高い価値があることを学びました。米の栽培は寮生活で得た一番の経験です」とソムチャイくんは話してくれました。

「寮では清掃や料理、樹木の手入れなど多くの当番がありますが、自分のためになる活動もあり、楽しんで参加しています」

8月の終わりに稲を植え替え、10月末から11月にかけて刈り入れをします。田が黄金に輝く11月、生徒と一緒に刈り入れをしました。みんなそろって田んぼの仕事に打ち込み、楽しみながらもチームとして結束し、作業中1人の遅れも出しませんでした。作業は遅くまでかかりましたが、生徒たちは夕食を取り、10時には寝床につきました。

ソムチャイくんより「皆さんの温かいご支援のおかげで、教師になりたいという夢を追うことができました。感謝とともに、自分と地域の生活をより良いものにするために一生懸命勉強することを約束します」

■Varunee skausang

2010年12月、外務省

の日本NGO連携無償資金協力事業としてラオス南部サラワン県において教員研修会が実施されました。同県は首都ヴィエンチャンから約800キロメートル（東京と広島間に相当）も離れている上、政府の予算・人材が不足しているため、2008年に行った教育改革の伝達・理解が遅れています。そのため、サラワン県のみならず地方の学校や教員への支援が緊急に必要とされています。

サラワン県内2カ所で開催された研修会（各7日間）に参加した教員は合わせて142人で、年間の授業計画の立て方や評価法、効果的な教材の使用法などを学びました。研修会の参加者は、「貴重な研修の機会に感

謝しています。子どもたちの教育のため、研修会で学んだことを実践していきたいです」と述べ、新制度に沿った内容で子どもたちを教えることができる喜びと、情熱に満ちている様子が伺えました。

普段はとても控えめなラオス人が、グループでの話し合いになると人が変わったように活発な議論を交わす姿に、地方の教員の情熱と教育の質向上の可能性を感じ、地方への支援の重要性と必要性を再認識させられました。新しい技術と知識を得た教員が、近隣の学校へも伝達・共有することで、新制度に沿った質の高い教育を受けられる子どもの数は、4千人以上に上ると推定されています。

■仁井勇佑

ラオス Laos 良い授業のため 熱心に学ぶ教員たち



ワークショップで郡教育局職員（左）のアドバイスを受け議論を深める参加者

ミャンマー（ビルマ）難民 Myanmar (Burma) Refugee Camps 日本の小学校から 絵のプレゼント



甲斐さんから絵や文具を送られた

SVA会員・地域活動者の甲斐之彦さんは、毎年難民キャンプを訪問され、地元の大分県中津市和田小学校、真坂小学校の児童の絵を寄贈してくれました。今回の訪問地は、1月27日、友人の金子謙三さんと共に、甲斐さんにとって7番目に当たるヌポ難民キャンプとなりました。

ヌポは、事務所のあるメーソットから南に約228キロ地点にある人口1万5千人程度の小規模の難民キャンプ。斜面に設置された他のキャンプと違って、ここは平地なので碁盤の目のようになっています。一瞬、30年前のカンボジア難民キャンプの風景がよぎります。

金子さんは子どもたちと東の間の交流会。読み聞かせやゲームの後、2人が文具、絵本に続いて、何十枚もの絵が入った包みを渡すと、お返しにとキャンプの子どもの描いた風景画を託されました。

キャンプの子どもたちはきつと和田小、真坂小からの絵に驚き、更に創作意欲をかき立てられたはず。閉ざされた環境にあっても、画材が足りなくても、絵の先生がいなくても、子どもたち同士でこんな風に励まし、学び合えるのだ、とあらためて感じました。両小学校の先生たち、甲斐さん、金子さんにも感謝致します。

■小野豪大

アフガニスタン Afghanistan 図書館事業協力機関の 招へい研修を実施



松岡享子理事長から日本の子ども図書館の歴史、活動について（東京子ども図書館）

SVAの図書館事業の協力機関であるナンガハル州の教育局視学官、情報文化局長、経済局長ら高位教育文化行政官ら4人を東京に招いて1月23日～29日に研修を行いました。

研修の目的は、日本での図書館や読書推進の歴史、政策、制度、図書館員の育成、実践を参加者が理解することでした。2日間にわたる講義の後に、品川区の学校図書館、児童センター、東京子ども図書館、逗子市の公共図書館を視察しました。

SVAは今年から2年間、農村部の学校図書館と公共図書館の改善のためのプロジェクトを行っています。今回の研修の参加者が、東京で得た知識や技能をこのプロジェクトに活かしてい

くことが期待されます。教育局視学官は、「日本では親が子どもの読書推進に関心を持っていることや、0歳からの読み聞かせをしていることに感銘を受けた。今後ナンガハル州で学校図書館員の研修で読み聞かせをより重視したり、児童が図書室を利用するように保護者に働きかけていきたい」と話しました。

さよならパーティーには、アフガニスタン大使のファテミ氏も参加され、アフガニスタンにおける草の根レベルでの教育支援活動と今回の研修に対する感謝状をSVAの若林会長に手渡されました。なお、この研修は、ユネスコアジア文化センターとの共催で実施しました。

■三宅隆史



Japan

あなたの身近で、日々の生活の中で工夫して取りくめ、参加できる国内での活動が広がっています。

shanti

絵本が現地へ旅立ちました 「絵本を届ける運動」

2010年ご協力分として、2月1日、カンボジア、ラオス、ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ向けの計360箱を出荷しました。

松本市の協力団体、「おなじ空ネットワーク」によりチェック、修正を受けた絵本18箱と港で合流し、2月中旬に出港予定です。

いつもお世話になっているボランティアの皆さん、「絵本を届ける運動」協力企業・団体の皆さんのお力をお借りして、滞りなく送り出すことができました。おってアフガニスタン向け絵本を空輸し、3月末までに各海外事務所へ届く予定です。(佐藤宣子)



絵本が入った段ボールを人力でトラックに積み込み

SVAの事務所でボランティア セールスフォース・ドットコム

セールスフォース・ドットコムでは、2004年より年2回のペースで「絵本を届ける運動」に取り組んでいます。2010年冬からは、SVA事務所にて、全国から集められた絵本を現地へ発送するための絵本の最終チェックと梱包作業のお手伝いも行っています。

「絵本のチェック作業は、絵本を手にする子どもたちに配慮して細かい修正をするもので、感動しました。梱包作業はかなりの力仕事ですが、チェックを重ねて着実に作業を進めている様子が印象的でした。大事に手をかけた1冊1冊がポロポロになるまで読んでもらえる一冊になる、この活動の素晴らしさを改めて実感できました」(参加社員によるコメント)

絵本が現地の子もたちへ届けられるまでの一連の流れを実際に体験することで理解することができ、SVAスタッフより直接活動の背景を伺うことで、途上国で暮らす子どもたちの現状を知る大変貴重な経験となります。

セールスフォース・ドットコムは、



上「ていねいに」絵本のチェック作業を体験する社員さん
下「こんなにたくさん」絵本をつめた段ボール箱の前で記念撮影(写真提供:セールスフォース・ドットコムファンデーション)

「1/1/1モデル」(就業時間の1%、株式の1%、製品の1%を地域社会に還元)を通じて、社会貢献活動とビジネスを統合した社会貢献活動を行い、社会を変革しようとしている団体のミッション達成を支援しています。これからも引き続き、SVAの活動を応援していきます。(セールスフォース・ドットコム 鹿村恵梨)



2月25日、東京事務所で表彰状の授与がありました

永年勤続のスタッフを表彰 最長は八木沢克昌(28年)

カンボジア事務所の手束耕治(26年1ヵ月)が続きます。二人ともSVA初期から活動しています。東京事務所で最長なのは、20年表彰の市川斉(19年11ヵ月)、関尚士(19年9ヵ月)。15年表彰は、小野豪大(16年6ヵ月)、大宮俊幸(15年7ヵ月)、三宅隆史(15年1ヵ月)、河口尚子(15年)。10年表彰は、服部貴子(14年6ヵ月)、藤川和美(12年)、鎌倉幸子(11年8ヵ月)、伊藤解子(11年4ヵ月)、中原亜紀(9年9ヵ月)です。表彰されたスタッフは感激の様子。気持ちを新たに仕事に励んでいます。(勤続年数は2010年12月31日現在)



職員ごとに小さなダンボール書店を出店。売店も

「本から本へのプロジェクト」 東京事務所が一日古書店に

2010年12月15日、SVA東京事務所が古本バザー「シャンティ古本まつり」を実施しました。2011年、SVAでは「本から本へのプロジェクト」を通して、30万冊の古本を集め、アジアで約1万冊の絵本出版を目指していますが、まずはSVAスタッフ自ら本やCDを出そうということで企画されたイベントです。茅野専務理事、関事務局長をはじめ、職員23人が参加し、数百点の本やCDが集まりました。東京は冬の冷え込みを見せた一日でしたが、会場のGallery Shantiは、「本から本へ」の気持ちを実感できるあたたかな空気に包まれました。(古賀東彦)



現地にいるスタッフの生の声を伝えました

松尾久美スタッフ報告会 「タイ、発展の影にいる子どもたち」

2月2日、JICA地球ひろば(東京都港区)において、スラムの活動はもちろん、国境地帯のミャンマー(ビルマ) 移民対象の移動図書館活動など、タイ事業の報告を行いました。スマトラ沖地震津波災害支援から関わった経験から「ミャンマー(ビルマ)人の被災者は保証が全く得られなかった。日本などに送る缶詰を作るためにタイの企業は安い労働者としてミャンマー人を使っている。まったく関係のないことではなく、日本と現地はつながっている」と語りました。当日は経理課長のオイススタッフ、学生寮担当のガランスタッフも報告しました。(清野陽子)

SVA 30周年「かけはし」プロジェクト



イベント開催セットを貸し出しています



祖国なき人々

SVAが設立された1981年にカンボジア難民が暮らすサケオ難民キャンプで撮られたドキュメンタリー映像。難民キャンプの様子やSVAがなぜ図書館活動を行っているのかひも解くことができます。



「SVAの活動を紹介するイベントをしたい」という声が届いております。30周年イヤーである2011年、SVAの活動を広めていただければ幸いです。3月末までにSVA主催のイベント3件の他に、22人の方がご自身でイベントを開催し、活動の紹介をしてください。活動紹介のために飾りつけができるものが欲しい」というリクエストも届くようになります。ぜひ、ご利用ください。

現地で出版した絵本

カンボジア、ラオス、ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ、アフガニスタンで印刷した絵本です。日本語訳もついておりますので、お楽しみください。出版をしていないタイプは活動の様子が見えるラミネートされた写真(A4サイズ)をお送りします。



子どもたちが描いた絵

サケオ難民キャンプの子どもたちが描いた絵です。遠く離れた故郷の風景を描いた絵や、内戦時代に目にした光景が描かれています。



クラフト・エイドの委託販売

アジアの女性が手作りした手工芸品をイベントで販売しませんか。

イベントの企画がありましたらSVAまでご連絡ください。SVAのホームページ、ブログ、ツイッターでイベントをご紹介します。

担当: 広報課 鎌倉幸子



パネル

A2サイズの活動紹介パネルです。8種類ありますので、貸出は広報課の清野まで(TEL03-5360-1233)お申し込みください。ホームページからダウンロードして使ってください。



プノンペンから ごんちちは チョムリアップ・スオ!



いまプノンペンで流行っているもの



オシャレ系カフェ登場!

プノンペンではオシャレなカフェが急増。友人や恋人との会話を楽しんだり、WiFiがある店にPCを持ち込んでネットをしたりするライフスタイルが若者に浸透しつつある。コーヒーの値段は、カンボジア人が行くカフェで\$0.5~2ぐらいで、外国人向けのところはもっと高い。ネットは無料のワイヤレス。写真はプノンペンのカフェチェーン「T&C World」の店内 (写真提供: Sothy Eng)

韓流がカンボジアのストリートを圧巻中!



日本でもおなじみの東方神起、少女時代、KARAなどの韓流ダンスグループが、ヤングファッションに多大な影響を及ぼしている。「ダンスがすごくスタイリッシュでカッコいい!わたしの周りではみんな韓流ダンスグループのヘアスタイルとかファッションとかまねしてる。今、カンボジアの若い人の中では、一番カッコいい存在だよ」と学生に大人気。写真は韓流風の髪型にしているボーイ (写真提供: Chea Phal)

フィットネス・ブーム

公園やジムなどで運動を楽しむ人たちが増えてきている。その理由を聞いてみると、ひとつは経済成長で増えた中間層がダイエットのため運動するようになってこと。もうひとつは、カンボジア人全般に言える、鍛えた健康な体への憧れ。経済成長は都市の一部の人を豊かにしているだけで、カンボジアはまだ貧困国。体を鍛えることで健康になれると信じている人も多く、日本人に比べ、体を鍛えるということに関心が向かう人が多いよう。(写真はミスター・カンボジア・コンテスト前の練習風景)



プノンペンの街角から
カンボジアに超高層ビル?
昨年9月、フンセン首相が、プノンペンに世界で2番目に高い555メートルのビルを建設する構想を発表した。総工費は5億~9億ドルと見積もられ、ビルの形はハスの花をイメージしたものになるとのことだが、果たして実現するの?



プノンペンに来て最初に驚いたことは、バイクの多さだ。街中どこを見渡しても、バイクを見かけない風景はない、といっても過言ではない。公共交通機関がないプノンペンの最も普及した交通手段だ。
カンボジアは、2004年から4年連続で10%を超える経済成長を遂げたが、この間に車とバイクが急激に増えたという。同時に朝夕の交通渋滞も年々ひどくなっている。「交通渋滞」といっても日本ものとは全く違う。「無法地帯化」状態である。道をひとつ渡るにも、誰が、どの順番で、どう渡っていくかといったルールが一切ない。ほとんどの道路に信号が設置されていないこと、人々の交通ルールを守る意識の乏しさが大

きな原因だといえる。特に、信号なしの交差点は大混乱になる。こちらの人はそんな交差点をどうやって渡っているのか?そこには、「先に突っ込んだ方が勝ち」といった暗黙のルールがある。大胆にも突っ込んでくる猛者がいると、とりあえずみんな回避しようとするのである。
ここには「歩行者優先」のような素敵な概念はなく、あるとしたら「高級車優先」ぐらいだ。みんなが我先にと行こうとして、につきもさつちもいなくなつた交差点を見てみると、人間のエゴで溢れる社会の縮図を見ているように、ちよつと感傷的な気持ちになる。
急激な経済成長を遂げている国だからこそ見られる、このようなアンバランスな情景の数々は、ここでしか感じられない醍醐味のひとつかもしれない。
プノンペンにお越しの際は、くれぐれも道路横断にお気をつけください。

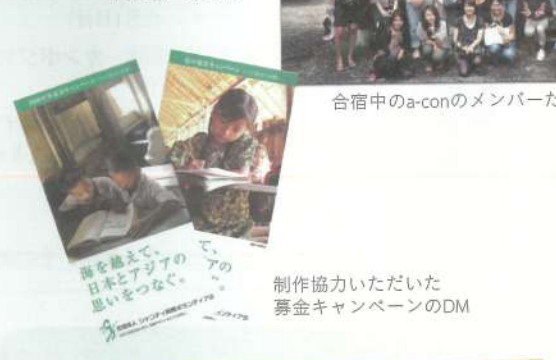
江口秀樹(えぐち・ひでき)
神奈川県出身、国内外のNGOでボランティアやインターンなどを経て、2010年SVA入会。声と書投の大きさに定評がある。趣味はジムでの運動。



53 山田裕一郎 Yamada Yuichiro やまだゆういちろう

Shanti

「NPOコミュニケーション支援機構(aicon)はNPOに広報・マーケティングなどのコミュニケーション領域のアドバイスなどをするボランティアグループです。
山田裕一郎さん(26)はaicon設立、運営メンバーのひとり。「SVA募金ダイレクトメール(以下DM)プロジェクト」のまとめ役として、「海を越えて日本とアジアの思いをつなぐ」私たちの思いが伝わるDM制作に協力していただきました。



山田裕一郎さん
合宿中のa-conのメンバーたち
制作協力いただいた募金キャンペーンのDM

がんばるNPOの活動やメッセージを、日本中にもっと伝えていきたい

全員がボランティアであるaiconメンバーが活動できるのは平日の夜か週末。「SVA募金DMプロジェクト」では会議のため夜8時から集まってもらっていた。本業との両立はどうしているのか、聞いてみた。
「サポートしたいという情熱があったら、工夫次第じゃないでしょうか。忙しい人ほど時間の使い方がうまいですね。僕自身、残業が月200時間近いときでもやっていました」

山田さんが友人とaiconを立ち上げたのは重工業メーカーの経営企画として勤めていた2007年。その後、外資系コンサルティング会社に移り活動を続

ける。「仕事では、事業の戦略を立てていたのですが、その結果が見えるところまでは関わらなかったんです。SVAの募金DMプロジェクトでは、取り組みの成果が見えたところが興味深かったですね」仕事とは違う手応えを得られたという。
また、広告・PR、メディア、ITなど企業に勤めているメンバーには「企業は利益の追求という物差しで動いている。しかし、SVAのプロジェクトでは、理念や目的に沿って動くこと、利益では測れない価値観があることを知りました」などの新しい気づきがある。

メンバーは若い社会人と大学生が一緒に考え、取り組んでいくことができるという。「NPOのスタッフとメンバーが一緒に考え、取り組んでいくや

休みの日は、ちよつと一息...

タイやカンボジア、ラオス。「Shanti」に載っている国に行ってみよう。言葉ができて子どもたちと話せたら、もっといいだろうなと思つたことはありませんか。そんなあなたの手助けになるのが、「旅の指さし会話帳」。旅先で使うあいさつや物の名前、数の数え方などの会話にイラストが添えてあります。屋台の店構えや、料理も絵や写真で載っているのを見て選んで初めての土地でも使いやすいのがいいところ。
駅でキップを買うとき、窓口でこれを指さしながら「キップください」と言ったら、係員さんが笑いながらお得な往復キップを教えてくれたこと。レストランではウェイターさんが気に入って、料理人に見せに行ったりしたこと。旅の思い出が増えるのが楽しく、私も愛用しています。季節のお祭りや乗り物、食べ物などが紹介されているので、見ていても楽しく、その国のことを知るのにも役立ちます。タイ語やカンボジア語、ラオス語、ダリ語(アフガニスタン)、ビルマ語と、SVAの活動地の言葉がほぼ網羅されています。ダリ語版にはバシクトウ語のあいさつも載っています。今度アフガニスタンからスタッフが来日したら、これで話しかけてみようかな。(清野陽子)

旅の指さし会話帳

タイ

「旅の指さし会話帳」
加川博之・著
(情報センター出版局刊)

SVAからのお知らせ

30周年に向かつて
2010年度
第二回通常総会を開催

2010年12月11日、サニー・テーブル（東京都渋谷区）において、2010年度第二回通常総会が開催され、全国から38人（委任状を含めて217人）の社員会員にご出席いただきました。

次年度の計画と予算案については、例年は代議員会で審議をしてまいりましたが、2011年1月を目指して手続きを進めてきた公益法人への移行申請に関連し、定款等の修正が直前まで想定されたため、本年は通常総会として開催させていただきました。結果的には、秋口の臨時総会以降、定款案等の見直しが求められることもありませんでしたので、移行手続きの進捗状況、2011年に向けた計画・予算案に加え、30周年事業の取り組みについても時間を取り、ご説明させていただきましたことができました。

また、2011-2013年の重点目標として、次に掲げる3つの柱についてもご検討・ご承認をいただきました。

- ①アジアの子どもたち165万人に読書機会を贈り届けていく
- ②現在の各国事務所の自立運営

に向けた取り組みを促進させるとともに、より困難な立場にある国において教育・文化支援活動を新たにスタートさせていくことを目指す

③「共に生き、共に学ぶ」社会の実現に向けて、行動を共にする人々を新たに8000人増やしていく

公益法人への移行に伴い、代議員制はその役割を終えていくことになりませんが、昨秋開かれたついででも確認し合われたとおり、今後の地域活動者は活動を、30周年を節目としてスタートさせた「かけはしプロジェクト世話人会」に移していくこととなります。一人ひとりに共感を与え、共に歩んでいただける取り組みを皆さまと一緒に考え、発信してまいりたいと思います。（事務局長 関尚士）

1月4日より 公益社団法人となりました

おかげさまで、SVAは、1月4日に「公益社団法人」として登記が完了し、今年からあらたな法人格でNGO活動を推進していくことになりました。

会員の皆さまには、昨年、臨時総会にて定款変更案や公益事業内容のご確認、ご承認をいただき、

さまざまなご助言を頂き感謝申し上げます。

総会の後、内閣府認定等委員会に移行に必要な書類を提出し、委員会とやり取りを行い、修正、追加作業を重ね、12月10日に委員会から答申、12月17日に内閣総理大臣から公益法人の認可書を受理し、1月4日に法人登記の運びとなりました。

定款で定めたように、公益事業の内容としては、(1) 開発途上国における地域開発のための事業、(2) 武力紛争や自然災害等による難民や罹災者等への緊急援助事業、(3) 開発教育・地球市民教育

及び国際交流事業、(4) 国際開発協力活動推進のため委託事業、という事になりますが、SVAの活動自体は今ままで変わりなく進めてまいります。

また、皆さまからお寄せいただいたおります募金に関しても、引き続き、税制優遇が受けられます。30周年の記念すべき年に、公益法人移行が出来たことは大変喜ばしい事であるとともに、私たちはより一層、活動の充実と努力を重ねてまいりたいと思います。今後ともご協力をお願い申し上げます。（専務理事 茅野俊幸）

東日本大震災の救援活動を開始

3月11日（金）に発生した東日本大震災の被災地にスタッフを派遣して、被災者支援活動を実施しています。被災された方へ心からお見舞い申し上げます、一人でも多くの方へご支援が届くよう、努めています。

◎緊急救援担当 白鳥孝太 薄木浩一郎

人事のお知らせ

入職	平島 容子	国内事業課 絵本を届ける運動担当 契約スタッフ (2月1日付)
	利根川佳子	海外事業課 カンボジア事業担当スタッフ (3月1日付)
	菊池礼乃	NGOジュニアプログラムオフィサー ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ事務所 (3月22日付)
休職	塚本真衣子	2月3日より休職
	林 飛鳥	1月28日より産休、その後育児休暇

スタッフのくまんと

新学期です

■新学期といえばランドセル。私が田舎の小学生だった頃、男子は黒、女子は赤というのがお決まりでしたが、東京から転校してきた女の子のランドセルは黒。男子からはからかわれていましたが、私は内心うらやましかったな。都会的で賢そうな感じがして、今は好みに合わせて色々。（経理総務課 黒澤真理子）

■昭和35年、東北の三陸沿岸はチリ地震津波に襲われた。女川町の知り合いのカバン店も大打撃を受け廃業に追い込まれた。そして「息子さん」と言って、プレゼントしてくれたのが学生カバンだった。そのカバンと共に臨んだ中学の入学式。あの店主はその後どうしているだろうか。（広報課 大宮俊幸）

■皆さまのこと思い出さず校かな——この春中学に入学するうちの娘の好きな句です。春といえどやっぱり桜……。昨年は家の近くにある多磨全生園（ハンセン病の療養施設）の桜を見に行きましたが、本当にすばしかったです。（経理総務課 河口尚子）

■編集後記 ■2月に帰国した松尾スタッフから聞いた話。駐在日本人が一人という中、タイ人スタッフが大変なことがあったら「言ってね」と声をかけてくれるそう。スタッフ同士も国籍を超えて「共に生き、共に学ぶ」のだと、実感した瞬間だった。（清野陽子）

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙 (SGS-COC-001773) にノンVOCインキ (石油系溶剤0%) で印刷しています。